

「半島地域づくり会議 in 島原半島」

開催概要

国土交通省都市・地域整備局
地方振興課半島振興室

「半島地域づくり会議」は、地域主体の手作りによる考え・学び・気づきの場として平成18年度から始まり、能登地域（石川県）、宇土天草地域（熊本県）、幡多地域（高知県）、下北地域（青森県）に続き、本年度で5地域目の開催となる。

今年度のテーマは、『つながるチカラ半島発のメッセージ』。半島地域には、地場産業の衰退や高齢化の進行などの課題がある一方で、地域住民が中心となって「半島地域ならではの」地域資源を活かした地域づくり活動が活発に行われてきている。このように多くの共通点を持つ全国の半島地域から集まった参加者同士が、“ともに歩き、語り、考える”交流を通じて、半島地域内外の人とつながることで生まれる可能性を探り確かめるため、平成23年2月12日（土）～13日（日）の2日間に渡り、長崎県島原地域を舞台に、以下のプログラムを実施した。

ー2月12日（土）プログラムー

【島原半島を知るフィールドワーク】

今回の「半島地域づくり会議」の開催地となったことをきっかけとして、“半島はひとつ”を合言葉に、島原半島で活動する地域活動団体メンバー、行政関係者等が市域を越えて集まりワークショップを重ね、それぞれが持っている強みや知恵、経験を活かし伸ばす実践的な方法を検討しはじめた。この島原半島地域づくりワークショップ（以下、「島原WS」）が企画したフィールドワークに、全国の半島地域及び地元長崎県内の約80名（地域づくり団体、行政関係者等）が参加し、島原WSメンバーがガイド役となった。

●コースⅠ：次の世代に伝えたい・残したい島原半島のお宝コース～半島の歴史、風土に根ざした

資源を守り活かす取組～（雲仙市・島原市）

スローフードに認定されている「雲仙こぶ高菜」石積による古式漁法の「スクイ」日本最後の玉絞り法による「和ろうそく」といった地域資源を大切に受け継いできた地元の活動主体メンバーから解説を受けつつ、こぶ高菜の試食、ろうそくづくりを体験し、効率性の点では課題も少なくないこれらの資源について、活用方法の再発見を試みた。また、ボランティアガイドの案内で島原まちなかを散策し、道の真ん中に流れる澄んだ湧水を見ながら武家屋敷を巡った。



（雲仙こぶ高菜の解説）（島原まちなか散策）



（本多木蠟工業所でのろうそくづくり体験）

●コースⅡ：島原半島のなりたちコース～お山とともにある島原半島の暮らし・産業・文化を再発見～（雲仙市・南島原市）

水はけの良い火山灰の土壌から成り立つ農業、美しい段々畑や棚田を作る山がちの地形、日本三大そうめんに数えられる南島原特産のそうめんを育てた土壌や水質・気候風土といった“見慣れた風景の中にあるジオと暮らしの中の物語”について現地を見ながら、火山活動による地形の成り立ちの解説や、温泉の熱を活用した温かい流しそうめん、ボランティアガイドによる原城跡、有家蔵巡りなどを体験した。



(日本一の大門松の竹を使った流しそうめん)



(原城跡、有家蔵巡り)

【グループワークー島原半島「思い出のアルバム」づくりー】

フィールドワーク終了後、8グループに分かれて、体験・交流を通じて発見したこと、感動したこと、印象に残ったことなどを振り返り、参加者それぞれが撮った写真を活用し、地域資源の見せ方・売り方の工夫などについての意見も交えながら、「思い出のアルバム」として発表した。

「島原半島には第1次産業の原点がある」「島原半島の魅力は多彩な色」「すべては火山につながった」「民話に出てくるような素晴らしい人がたくさんいる」など様々なテーマが出された。



(「思い出のアルバム」制作～発表)



(発表作品)

【食を通じた交流会ー島原半島食談義ー】

雲仙温泉において、全国第2位の生産量を誇る地場産じゃがいもの地獄蒸し、スローフード認定のこぶ高菜・エタリの塩辛、島原そうめん、棚田米、ピロツケなどの島原半島の海・山・里の食材を活かした郷土料理が用意され、島原半島の民話の紹介や、千々石の御神楽(千々石中学校吹奏楽部)が上演された。



(地元食材を活かした郷土料理の解説)



(有明童話の会「くすのき」による発表)

ー2月13日(日) プログラムー

【全体会議】

2日目は雲仙市ふるさと会館において、全国の先進事例紹介やパネルディスカッションを通じた全体会議を開催。1日目の参加者に加え、地元住民や行政関係者等、約130名が参加した。



(国土交通省森下審議官より開会挨拶)

●キーノートスピーチ

NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会理事長の澁澤寿一氏より、半島地域の持つ魅力や可能性について、特に都会では失われてしまった地域社会の繋がりや伝統文化、思想などを次世代に継承するとともに、それらを新たな魅力、本当の豊かさの基準として全国に発信していくべきであるとのテーマが提示された。



(会場の様子)

●「つながるチカラ」事例報告

津軽、下北、幡多地域の3団体の取組事例が発表され、東京農業大学山村再生支援センター木質系CO2部門長の中山幹生氏のコーディネートにより、自分たちの力で地域の新たな魅力に気づき、地域の資源として活かしていくことの価値を参加者で共有した。

<コーディネーター>

中山幹生氏（東京農業大学山村再生支援センター木質系CO2部門長）

<事例報告者>

①澁谷尚子氏（奥津軽地域着地型観光研究会）

「夢と実践の狭間で見えること」

②古川たらこ氏（ぷらっと下北）

「理屈こねる前にまず動け！走りながら考える！ぷらっと下北の挑戦の巻」

③睦地和也氏（まちづくりマーケットプロジェクト）

「幡多・マーケット「海辺の日曜日」」



(事例発表の様子)

●島原半島における連携協働の取組

中山氏のコーディネートにより、島原WSメンバー3名でのトークセッションを行い、立ち上げから全6回に渡るワークショップを振り返り、「これから先もつながっていききたい戦友ができた」と成果を確認した。

<島原WSメンバー>

- ・町田岩太氏（千々石こだわり倶楽部）
- ・金子加代子氏（有明童話の会「くすのき」）
- ・加藤宗俊氏（雲仙湯守の宿 湯元ホテル社長・島原半島ジオパーク推進連絡協議会会員）



(島原WSメンバー)

●パネルディスカッション

澁澤氏のコーディネートにより、パネリスト5名と共に、半島全体のメッセージとして、1日目

のワークショップのふりかえりや事例報告を元に、『つながるチカラー半島発のメッセージ』のテーマを深めた。

<コーディネーター>

澁澤寿一氏 (NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会理事長)

<パネリスト>

- ・高木まゆみ氏 (奥津軽地域着地型観光研究会)
- ・畦地和也氏 (まちづくりマーケットプロジェクト)
- ・古川たらこ氏 (ぷらっと下北)
- ・町田岩太氏 (千々石こだわり倶楽部)
- ・関根千佳氏 (株式会社ユーディット代表取締役)



(パネルディスカッション)

◎主な意見等

テーマ1：フィールドワークの振り返り

(関根氏) 観光は地域を支える産業であるだけでなく、地域資源の価値の気づき・地域住民にとっての誇りの創造にも貢献する。

(町田氏) 山登りと同じで、四苦八苦して、きつかったときほど、登り切ったときに嬉しい。一緒にやったら楽しいじゃないか、という思いを共有することが、原動力になると思う。



テーマ2：つながるといいこと

(高木氏) 着地型観光のメニューづくりは、関係する団体が自分自身の利益のために動くのではうまくいかず、皆が地域全体をよくしていこう、地



域を元気にして次の世代に受け継ごうという意識を共有して初めてうまくいく。

(澁澤氏) 「つながる」のキーワードは、「熱い」、「温かい」ではないか。その人の思いの強

さ、熱さが、他の人に繋がる、火をつけるのではないか。誰かが損して誰かが得するのではなく、みんなが少しずつ損をする方がよい。

(町田氏) 地域づくりは、強い者が弱い者を経済的に助ける、というのではなくて、寄り添うこと、同じ志に向かって一緒に進んでいく仲間関係を作っていくことだと思う。



テーマ3：「半島らしさ」とは

(高木氏) 観光に合わせる必要はなく、ありのままの姿でいることが半島らしさ。ただし受け継いできたものをつなげ、「丁寧に暮らしましょう」と言っている。

(畦地氏) 顔の見えない関係、冷たいお金、匿名社会が皆、嫌になってしまっているのではないか。6次産業は、1+2+3ではなく、1×2×3、



つまり1次産業がなくなればゼロになってしまうということ。半島は、不利条件もあるが、そこに困っていないで生活できる。更に、やろうと思えば自給100%で半島社会をつくることので

きる。やろうと思う人が、いかに多くいるかどうか。島原半島で印象的だったのは、一次産業の伝統を守っていこうという人たちがいること。こぶ

高菜も和ろうそくも。その哲学はローテク・ローインパクト。それは持続性のある社会。

(関根氏) 自給、半島での完結も大事だが、一方で子どもを学校にやるためにある程度の現金収入も必要。1次×2次×3次=6次産業、そのための加工力、販売力、プラスして観光も乗せてみたらいい。観光は、単に客がきて金を落としてくれる、という効果だけではなくて、地元の人が気づかないでいるところを、外からの目で気づかせてくれる、「目からウロコを落としてくれる」効果がある。

半島にはフロンティアスピリッツがつまっている。海を通じて世界に開いている。イノベーションは辺境から始まる。世界を変える発想をする人が出てくる可能性が、半島にはある。



(瀬澤氏) 経済という柱一本に寄って 50 年間やってきた日本社会の中で、半島だけは、三方の海という広がり、一方を陸につながっていることが、閉じた循環と外への発信、両方の特性をもっている、そうした

社会が、仮に今の経済の手法・ものさしで見れば豊かではないが、遠くない将来、都市へのアドバンテージを持つことになると思う。半島のあり方を議論することは、50年後の日本がめざす方向を議論することにも繋がるのではないか。

(古川氏) 都会の暮らしに憧れ大学進学を機に東京に行った。お金があれば雑誌に載っているお店に行ったりするのはいくらでもできるが、10年もやれば飽きてしまい、地元下北に帰ってきた。前は東京に認められることが成功と



考えられてきたが、今はそうではないという考え

が日本各地で起きているのではないか。「二流、三流の都会では意味がない。一流の田舎を目指す」。

(瀬澤氏によるまとめ)

・「お互い様」と寄り添うだけで勇気がでる。生きていることを知っていてくれる仲間がいることは経済的価値に勝る。

・1次産業という、自分たちの命育む哲学を持つこと。

・何となく社会に不安を持って生きるのではなく、「どのように生きることが幸せか分かる」様な生き方をする事。

◎参加者のアンケート (一部)

- ・「子どもが地域を誇れるように伝えていきたい」
- ・「アジア・熊本など、もっと広いネットワークへつなげたい」